

『漁村と教育』(1955年) についての考察 —文学教育を中心に—

A Study on “A Fishing Village and Education” (1955)
—on education of literature—

河 野 智 文

Tomofumi KAWANO

国語教育講座

(平成21年9月30日受理)

1 はじめに

大分県教育研究所は、1951年から「研究報告」を刊行している。その第6集, 第7集が、『漁村と教育』である。本稿は、第4集『山村と教育』(1953年)をとりあげた拙稿(注)に続き、この『漁村と教育』を考察の対象とする。

2 『漁村と教育』の概要

二分冊になっている『漁村と教育』の概要は、以下の通りである。

大分県教育研究所『研究報告第6集 漁村と教育』

1954年4月25日印刷 1954年4月30日発行

A5判 274ページ

大分県教育研究所『研究報告第7集 漁村と教育 第2分冊』(奥付は『漁村と教育Ⅱ』)

1955年3月31日印刷 1955年4月1日発行

A5判 169ページ

『漁村と教育』「もくじ」

はしがき—この書の構成について—

序論 教育及び教育研究の基本問題

つながり 漁村・どこに問題があるか

第Ⅰ部 漁村教育の過程—意識と行動様式の形成・その歴史的社会的性格—

問題と仮説・方法

分析〈1〉近代社会における教育の構造的位置

〈2〉地域共同体の成立・そこにおける教育

〈3〉漁民—その意識と行動様式の形成

〈4〉漁民—自覚的主体者の形成

第Ⅱ部 漁村の人間形成—地域教育計画の構成〈1〉漁村教育社会調査—

問題と仮説・方法

〈第Ⅰ次作業〉漁村類型と教育諸問題

〈第Ⅱ次作業〉保戸島の教育社会調査

分析〈1〉社会(1) 〈2〉社会(2) 〈3〉教育 〈4〉青少年

学習の手引

漁村年表／文献の理解／あとがき

『漁村と教育 第2分冊』

「もくじ」

はじめに

前をうけて

第Ⅲ部 漁村教育計画の一般構成—地域教育計画の構成〈2〉教育目的の設定—

第1章 漁村の社会課題

第2章 漁村の教育目的—保戸島の場合

第3章 教育内容の性格

第4章 教育方法の性格

第5章 地域教育体制の性格

第6章 教育基底構造—教育目的の技術的表現

第Ⅳ部 漁村の学校教育計画—現場の実践を土台にして—

第1章 学校教育構造と地域社会

姫島の場合／深島の場合／尾浦の場合

これらを土台にして

第2章 教育課程の計画

基礎技術力課程の実践その計画

問題解決力課程の実践その計画

実践生活課程の実践その計画

あとがき

3 漁村の特性と教育内容

本書では、大分県内の複数の漁村について、その社会調査をおこない、得られた結果を教育内容に反映させようとしている。本稿の主眼は、国語科教育の視点から本書を考察することにあるので、この経過は省略するが、たとえば、「基礎的知識・技能」の学習については、次のように述べられている。

二 基礎的知識・技能の訓練の学習—学校教育に主要にあらわれるもの—

いわゆるドリルの学習について、われわれは次のように考えていこう。

漁村学校の学力水準は極端に低い(マ)。(第1分冊第Ⅱ部 P.224~227) これらの理由について、いくつか考えられる。

最も基底的原因を探ろうとする研究者は、漁村の階層構造と子弟の学力差をみることにより、問題は、分化の進行につれて生活水準の低い層が多くなり、教育内容が異質になつていくからであるという一つの分析を試みている。(第1分冊序 p.48~49)

われわれは、現在の教育内容が近代的市民的よそおいであられすぎるからではないかと考え、かつ漁民の思考と行動が、その生産の原始掠奪性(農耕的管理性がなく・自然生産を支配し得ず・観察もしえないという性格など)に基くゆがみをもち、それが近代教育の内容を主として支配している合理的思惟・計画的行動と大きな落差を生んでいることに基くのではないか、などの推論を試みている。(続教育社会学講座「僻地の教育」(東洋館未刊)の森田(俊男氏—河野注)の稿「離島—教育環境としての」)

知能指数や学力水準が年令と共に落ちていくことを、どのような教育で回復するか。これがいわば、漁村教育の直接的課題であると考えてよい。その際、教育内容を今のまゝにしておいて、それを念を入れ、力を入れ、時間をかけてやることで可能だとは考えられない。その点は籠山教授等の報告(昭和29年日本教育社会学会)によつてもかなり確かであろう。

教育内容を、漁村社会の問題において系列化するという原則（今までわれわれのとつてきたもの）は、教育の社会的課題からの帰結であつた。しかし同時に、教育の方法的観点からも、教育内容をもつと漁民の生活、思考と行動に近づけ、そこで頭脳を訓練し、思考法を改めなければ、決して回復しえないと考えられる。また、だから、単に基礎的なものを反覆訓練することだけでは決して働く知識になつていけないので、生活の中でそれを働かせる契機を作るといふ、生活的な方法をとらなければならないだろう。

基礎的な知識・技能の一つとして、コミュニケーションの技術を取りあげよう。いわゆる 3 R S である。出稼に出た子どもに、自分で便りを出せる学力をどうしてつけるか。

△や×で漁業記録をつける名人漁師が、数字と文字を正しく使つて記録することで、その技術の公開普及（社会的生産の増大）が可能になるのであるが、最も必要なものだけをどうして身につけさせるか。

まず漁民の生活に必要な、コトバ・符号・数学計算を推定し（出来れば調査し）生活的能力の最低をおさえない。

次に、現在の教育内容とのちがいをたしかめる。

次に、生活の過程（兄に出すのに必要な漢字・表記法→葉書とポスト・郵便局→兄からの返事よみ→また返事がき）を学習の中にくみ立ててやることと、必要な漢字と表記法のドリルの時間との関係・割合とを具体的な実践で確かめていく。

つまり漢字のドリルを、漁民生活から遠い字も何もかも一緒に、時間をかけて重ねてやり覚えさせるという方法の非生産性を、充分反省したいのである。

計算が、漁民の生活のどこに、どのような形ではたらいっているか、を教師が少しも知らずに、身につく力（働くチエ）を形成することは出来ないと考えられる。

漁村出身の教師が少なく、漁民・漁業を全く異質のものとうけとる人びと（農村や都市の人びと）が多い。多くの農村出身教師は、漁村を理解できず、漁民の生活に近親感、共感をもちえないで、次から次に転出していくことにも基づくことであろう。（第1分冊第Ⅱ部 P.220, 137）

かくて、漁村教育における訓練の学習は、まず何を訓練すべきかの内容をとらえ、次にその訓練をどのような生活的（問題解決的）契機に結びつけ、身についたものたらしめるか、この過程を明らかにすることからはじまるべきであろう。

新聞部・放送部・気象部などの形で、実践目標をもつた活動の中に言語技術をきたえることが必要である。子ども達と出稼している兄弟との間に文通をさせることを一つの部活動でまとめていくこともよいだろうし、とにかく 3 R S の基礎教育における訓練の学習は、適度の反覆訓練を決してそれだけに終らせないで、生活の問題で確かめさせ、使わせるように学習全体を組織することが必要であろう。

（『漁村と教育 第2分冊』61-62ページ）

「基礎的な知識・技能の一つ」が、「出稼」先から「便り」を出せる学力、漁業記録を書く力などとして想定され、「漁民の生活に必要な」「生活的能力の最低」を満たすものとして考えられている。そしてそれらを「生活的（問題解決的）契機に結びつけ」ることが指導過程の基本になるのである。教材の選定も、このような「漁民の生活」の観点からなされることになる。

4 教育課程の構造

教育課程の構造化については、次のように述べられている。

2 漁村学校のエ育課程構造

さきに（第Ⅲ部第3章）われわれは、漁村教育の内容を規定するものとして三つのものをあげた。まず構造化：日本の現代教育に課せられた課題は、教育史的に見るならば①封建制の克服・近代化と②資本制の矛盾克服・近代の超克という二重のものをもつ。（だから明治以来）学校に課せられてきた役割をひろい上げ批判的にしくむことで現代の学校教育の基本的な構造が求められる。①よみ・かき・けいさん（コミュニケーションの力）②職業の技能③自然科学の知識・技術（科学的認識・態度）④健康な身体⑤文化・芸術のうけつきと創造の力⑥社会科学の知識・技術（科学的認識・態度）（明治以来の国民教育の主要な役割であつたかたよつた国家主義的な社会の認識・態度の教育は排除され、正しい科学

的な社会の認識とそれに基く社会行動の技術の教育がくみ入れられた)

次に系統性：日本社会・漁村社会の基本問題系列とそれぞれの問題を（イ）科学的に、（ロ）社会的共同によつて解決していこうとするとき必要な科学・技術・社会的組織などが、系統を性格づける。

次に実践的統一性：ただ単なる日常的な生活経験ではいけない。実験的な実践的な生活を組織しそこで子どもたちに、（イ）自治的（ロ）生産的な（ハ）社会奉仕的な（ニ）研究的な「生活」を行わしめることにより、すべての学校教育（さきにあげた六つの教育内容）を統一する必要がある。

そして、教育基底構造として、教育の四つの内容領域をあげた。人間性・実践性・生活と科学性・生産と政治性、がそれである。

そこで、われわれは、この六つの歴史的な教育内容と、四つの内容領域の関係性を基にして漁村学校の教育課程構造を立ててみる。

（『漁村と教育 第2分冊』76-77ページ）

これをふまえて設定されたのが、以下の「教育課程の構造」である。

教 育 課 程 の 構 造

人間の形成という指標でみた 教育の内容領域 (価値創造の領域)			I 人間性	II 実践性	III 生活と科学性	IV 生産と政治性
学校に課せられた 役割を歴史的にとらえて 考えられる教育内容						→
学校内 課程	基礎 技術力 (課程)	1. コミュニケーションの 力 (技術)	(国語・算数)			
		2. 職業的技能の力 (技術)	(職業・工作・家庭)			
		3. 美的創造の力 (技術)	(音楽・文学・美術)			
		4. 健康 (技術)	(保健・体育)			
	問題 解決力 (課程)	5. 自然に対応する力 (自 然科学の認識と技術)	(理科)			
		6. 社会に対応する力 (社 会科学の認識と技術)	(社会科)			
	実践 生活 (課程)	基礎技術力と問題解決力と の統合	(学校行事) (研究活動とレクリエーション活動) (生産と社会奉仕) (自治活動)			
学校外 課程	実践 生活 (課程)	基礎技術力と問題解決力と の統合	(地域社会行事) (社会奉仕) (研究とレクリエーション活動) (自治活動)			
課題の共同性と個人性			共同の課程		個人の課程 個人指導 個人相談	

（『漁村と教育 第2分冊』77ページ）

5 文学教育の実践

上の構造の「学校内課程」「基礎技術力（課程）」「3 美的創造の力（技術）」に位置づく「文学教育の実践」として、小学校5年生のものと、中学校1年生のものがあげられている。以下、引用する。

二 文学教育の実践—美的創造の力—

不撓不屈の精神をもとう（保戸島小学校第5学年）

文学教育は、先にも述べたようにコミュニケーションの力をつける言語能力の指導とは別個に考えてゆく。そこで、ここでは文学作品の指導と思われるものゝ資料を報告する。（実際は、どの学校も国語教育の中で言語教育と同時に取りあつたものである）

われわれが、文学作品を子どもに読ませることは、決して文学者や文学研究者をつくるためにおかない。むしろ、すぐれた文学を読ませることによつて子どもたちに現実の正しい認識を与え、人間に対する確信と生きていく力を与えることに目標をおこうとする。大半の女生徒が卒業したら別府の女中奉公に出稼ぎにゆくというような漁村では森鷗外の「山椒大夫」を通じて基本的人権の尊さ、人間の力の可能性等を知らせ生徒達を勇気づけ前向きのかまえ、をさせることも出来る。（もちろんこの作品の限界はあろうが）つぎの「北極探検」は、偉大な業績を残した、フリチョフ・ナンセンの記を生徒に鑑賞させようとしているものである。学校を卒業したら漁船にのり組んで遠く海洋に出漁してゆく漁村の少年たちにとつて、ナンセンのあの不撓不屈な精神、しかも科学的な態度や綿密な計画は、おそらく漁村の少年たちの意識をゆさぶることゝ思われる。こうした文学教材が、子どもたちの現実におかれている地域や生活の生々しさの中で鑑賞されてゆくとき、はじめて文学教育は正しくすゝめられたと言えるのではないか。

〈資料〉

単元 北極探検

一、目標

フリチョフ・ナンセンが科学的な準備と不撓不屈な精神とによつて北極探検に輝かしい業績をあげたことと、身を以つて世界平和のためつくした、偉大な業績とを、読みとらせ、彼の真実とその人類愛の精神が結局、彼をして、この偉大な業績をあげさせたのである事を知らせる。

二、指導計画 総時数 二十五時間

1. ノルドマルカの森	3 時	2. 少年フリチョフ	2
3. ヴイキング号	3	4. グリーンランド横断	2
5. 氷上の木とごみ	2	6. フラム号	2
7. 北極へ	2	8. 氷の圧力	2
9. 北緯八十六度十四分	2	10. フラム号帰る	2
11. 平和の人	3		

三、本時案 第二次の第二時扱い

1. 教材 少年フリチョフ
2. 目標 少年ナンセンの生い立ちと、彼の性格が父母の気質をうけついでいる事を知らせる
3. 準備 世界地図、地球儀
4. 展開

段階	学習項目	児童の活動	教師の指導	評価
導入	話し合い	前時の話し合い	前時学習の経路を間違いなく話させてみる	・間違いなく話せるか
展開	指名読 内容研究	・みんなに分り易く、読む ・生まれた所、何年前か、その時の事を地図で調べる ・ナンセンの様子を箇条書にする	・早さ、句読点に注意する。 ・ノルウエーは海国で海に国が支配されるので研究をすること ・よくその性格をつかませながら簡単に書かせる	・みんなに分かるか ・ノルウエーの位置は
整理	味読 黙読	・指名して読ませる ・味わいながら読む	・自分のとの違いを見つけさせる (板書)	・性格をつかんでいるか
次時	予告	・三、ヴィキング号をよく読んでくる	・ナンセンを本当に理解して読ませる	・よく聞いているか ・姿勢

漁村の認識を深めるために（保戸島中学1年）

現行教科書の文学教材にとりあげられている文学作品の傾向はきわめて偏向している。例えば自然の観照を主にした小説・詩・俳句等が圧倒的に多い。これらの作品を子どもに読ませることによつて、われわれは漁村が直面している基本的課題を解決してゆくような子どもたちをつくることは至難ではないかと考える。例えば、次にかゝげたような文学作品でいつたい漁村の子どもたちの生き方にどのような明かるさをもたらすことが出来るだろうか。その点では、現在の文学教科書の内容は徹底的に再吟味の必要があろう。芥川の「トロッコ」は確かに少年の心の動きをみごとに描いてはいる。しかし、日本の基本問題の中にほうりこまれている漁村のあのきびしい現実の認識、あるいは民族的自覚といったものをどれだけ培うことができるか。こうしたきわめて観照的なものばかりが採用されているところに問題があるわけである。「トロッコ」「飯待つ間」「安寿と厨子王」「ねこの踊り」等は大体、どの教科書にも採られている作品である。「安寿と厨子王」は、人身売買・ドレイ制度といった作品であるが、それでも鷗外が当時の社会情勢の中で軍医総監であつたということの制約はこの作品を決定的に弱いものにしている。

〈資料〉

一 単元 文の味わい方

二 目標

1. 物の見方考え方を深める。
2. 文学作品を鑑賞する態度、技能を養う。
 小品文の味わい方 写生文の味わい方
 物語の読み方、味わい方 ユーモア作品の味わい方
3. 文学作品の選び方を育てる。
4. 簡単な文語文の読み方に慣れさせる。
5. 歴史的かなづかいの読み方とその理解
6. 動詞の活用を理解させる。
7. ことば、漢字を習得させる。

三 指導方針及計画

1. 連絡と発展

- 一年単元 II「読む楽しさ」 IV「自然に親しむ」
 二年単元 I「詩と短歌」 XI「文学の味わい方」
 三年単元 II「文学の鑑賞」 III「古典入門」

2. 方針

中学一年といえば、読書発達の面から見て、冒険物語、探偵物語、歴史物語等一連の物語、少年文学の時代から、文学作品に興味を増し、関心を示して来る時代である。

然し乍らこの生徒の知能発達、読書心理の過程から見ると、必ずしも、こゝに至つていないことは事実である。これまで半年の指導段階からしては、一応この様な単元を指導することによつて、冒険、探偵より歴史物語へ進めて、この単元のねらいである、文学鑑賞の基礎的態度、技術としての味わい方を充分培いたいと考えている。

3. 計画（十八時間）

- イ 心理を描いた作品 「トロッコ」とその鑑賞 芥川龍之介 四時間
 ・小品文の味わい方 ・芥川龍之介とその作品
- ロ 写生文 「飯待つ間」 正岡子規 二時間
 ・写生文の味わい方 ・正岡子規とその作品について
- ハ 物語 「安寿と厨子王」 森 鷗外 六時間
 ・物語の読み方味わい方 ・森鷗外とその作品について
- ニ ユーモア作品 「ねこの踊り」 夏目漱石 四時間
 ・ユーモアを味わう ・夏目漱石とその作品について
 「江戸の笑い話」 一時間
 ・つばあきなひ 石川雅望 ・くねんぼ 柴田鳩翁 ・貸し家札 笹川臨風執筆より
- ホ 文法 一時間

動詞の活用について 文語文と古典かなづかいについて

（『漁村と教育 第2分冊』117-119ページ）

小学校の実践では、「すぐれた文学を読ませることによつて子どもたちに現実の正しい認識を与え、人間に対する確信と生きていく力を与えることに目標をおこうとする」と述べられ、作品の「鑑賞」によって「不撓不屈な精神」「科学的な態度や綿密な計画」を意識させることがめざされている。

このことは中学校の実践にも共通しており、「漁村が直面している基本的課題」「きびしい現実の認識」がめざされている。ただし、文学史や言語事項の知識を習得させたり、「文学作品の選び方」を身につけさせることも、あわせて目標とされている。18時間をかけて、広い分野の作品に多くふれることもめざされており、次に引用する読書教育ともつながりをもっている。

6 読書教育の体系

先に示した文学教育とは別の項に、文学教育と関わらせた読書について言及されている。展開案も含め、以下に引用する。

ハ 読書技術の系列と展開案—文学教育—

文学教育は教科書に出ている作品だけでは殆んど用をしない。どうしても学校図書館の充実やすぐれた文学作品を読んでやるといふような方法をとらなくてはならない。漁村の文学教育は、単に生活の教養の具として生徒におしつけてはならない。文学作品を読ませることによつて、生徒たちの生活の中にある問題意識をほりおこし、ひきだし、発展させてゆかねばならない。殆んどの女生徒が別府の女中奉公に行きたいと言い、民主主義はよくないことだと思つてゐるような生徒たちに（第Ⅱ部〈4〉）志賀直哉の「焚火」や「城の崎にて」、芥川の「トロソコ」等を読ませても何の役にも立たないことは、われわれはいやというほど悟つてはしないか。漁村の文学教材はもつと子どもたちの生きることに確信をもたせ前進する勇気をもたせるような作品をもちこんで行われなければならない。つぎに、漁村の子どもたちにはこういうことをよくのみこませたい、こういうことで意識を変えてゆきたい、等といつた際に、どのような作品をつかつたらよいかという一つの体系を示してみた。

◇漁村における文学作品の内容系列

(1) 自然に対する人びとのたえまない闘いの意味をわからせるために

（→基底構造のⅢ）

漁村の子どもたちには、人間の行為は、常に“自然からうばう行為”“自然からたゝきのめされる行為”でしかみえない。これは漁業生産がなお原始掠奪生産を脱していないこと、漁村・漁業は常に日本の“天災”の攻撃を受けていることに基くものであろう。そこで、漁村の子どもたちに、自然の現象は人間の手を加えるもの、人間の手によつて変え得るものだという確信をもたせることは極めて必要なことであろう。花鳥風月的に自然を礼賛させる文学教育（例えば、今の国語教科書を見よ。）では漁村の子どもたちにとってはこと足りない。（保戸島小のフリョフ・ナンセンの展開がここで役立つ）

- ・「ロビンソン・クルーソー」デフォー
- ・「ベスト」カミュ
- ・「グスコブドリの伝記」宮沢賢治
- ・「ハコネ用水」タカクラテル
- ・「恩讐の彼方」菊池寛
- ・「TVAの少年」チユニス

(2) 基本的人権の尊さを守り、これをかちとる困難なたゝかいの姿を知らせる。

（→基底構造Ⅰ）

先にもふれたように、漁村の女性との殆んどが別府の女中奉公に行きたいと考えていること、親たちも奉公せにや人間にならんと思つてゐること、網方→子方、船主→舟子の身分関係は子どもたちの間にもまだ残つてゐること、（→第Ⅱ部〈4〉）こうした漁村の子どもたちに、人間の尊さをまもり、これを獲得してゆくためのたゝかいの姿をからだでうけとめてゆくことは文学教育でなんといつても必要なことであろう。

- ・「レ・ミゼラブル」ユーゴー
- ・「復活」トルストイ
- ・「破戒」島崎藤村
- ・「アンクル・トムズ・ケビン」ストウ
- ・「にぎりえ」樋口一葉
- ・「路傍の石」山本有三
- ・「生まれいづる悩み」有島武郎
- ・「第二のチャンス」ゲオルギウ
- ・「幼年時代」ゴリキー
- ・「土」長塚節
- ・アンデルセンの物語
- ・「貧しき人びとの群」宮本百合子
- ・「山椒大夫」森鷗外

(3) 働くひとびとの喜びと幸福の実現のための偉大な仕事について知らせる。

(→基底構造Ⅳ)

漁村の子どもたちは、みんな都会を憧れている。生産にたずさわることを極度に嫌っている。危険な原始的な生産の中で追いつかわれるより会社員になり女給になった方がはるかにいいと思っている。(→第Ⅰ部〈4〉) 働くことの喜びや幸福は微塵だにもついでない。こうした子どもたちに働くものゝ幸福を阻もうとするものとのたゞかいの姿を理解させてゆくことは大切なことである。

- ・「私は愛す」アヴデーエンコ
- ・「鋼鉄は如何に鍛えられたか」オストロフスキー
- ・「母」ゴリキー
- ・「李家荘の変遷」趙樹理
- ・「朝あけ夜あけ」住井すえ
- ・「鉄の町の少年」国分一太郎
- ・「雨の日も風の日も」労働省婦人少年局
- ・「母の歴史」鶴見和子・木下順二
- ・「生きる」山田うた
- ・「坂道」壺井栄
- ・「みゝずと蜜蜂」巖文井

(4) 自分を大切にしみんなで手を取りあつてゆくことの大切さやそのすがたを理解させるために

(→基底構造のⅠ)

漁村の子どもたちは大人のマネをして民主主義はよくないという。船主→舟子の身分関係がはつきりしていないといけないというのである。若者宿でのツナガリはやはり第一次集団の中での人倫関係が強い。“漁師は一にも二にも努力”だという考え方の中にはオレさえよければという掠奪生産の競争を含んでいる。(→第Ⅱ部〈4〉)

だから漁場や漁法が極めて個人的に秘されてしまっている。漁業組合の発展しない理由もこんなところであろう。そこでこうした漁村の子どもたちに、自分を集団の中で最善をつくして発揮させ、またみんなで助け合つて集団を進めてゆくというようなことの大切さを理解させ、そういうすがたを具体的に知らせてゆくことが必要であろう。

- ・「ヴィーチャと学校友だち」ノーソフ
- ・「こぐま星座」ムサトフ
- ・「ツバメの大旅行」秦兆陽
- ・「十五少年漂流記」ベルマ
- ・「杜子春」芥川龍之介

(5) みのまわりに平和をうみ出し世界にひろげていく意欲を高め長つづきさせるために

(→基底構造のⅡ)

戦争の惨劇は漁村にも直接ひびいている。第二次大戦で船を奪われ、若者を失い、児童125名を爆死させ、国際漁場をせばめられ、ビキニ被爆の船員二人も出した。(→第Ⅰ部〈2〉) こうした惨めさに打ちひしがれた漁村の子どもたちに平和を守るための闘いの意欲を燃えあがらせるための文学教育は極めて大事なものになってくる。

- ・「二十四の瞳」壺井栄
- ・「母のない子と子のない母と」壺井栄
- ・「若き親衛隊」ファジエーエフ
- ・「世界の重み」モルガン
- ・「あらしの前」「あらしの後」ヨンゲ
- ・「バンビ」ザルテン
- ・「光ほのかに」アンネ
- ・「狸」伊藤永之助
- ・「土」長塚節
- ・「最後の授業」ドーテー
- ・「引力」李広田
- ・「クオレ」アミーチス
- ・「阿Q正伝」魯迅
- ・「木の人形」老舍
- ・「原爆の子」長田新

(6) 漁村の生産や生活のすがたを読みとらせるために

（→基底構造のⅢ）

文学作品で、漁民や漁業・漁村のすがたを描いたもの。さらに、漁村に生きる人の意識にくいこむもの、こうした作品は極めて少い。このことは日本文学において、いかに漁民漁村漁業が縁遠い存在であつたかを物語るものであろう。（→第Ⅰ部〈3〉）

- ・「死んだ海」村山知義
- ・「のりそだ騒動記」杉浦明平
- ・「蟹工船」小林多喜二
- ・「基地第六〇五号」杉浦明平
- ・「潮騒」三島由紀夫
- ・「白鯨」メルヴィル

◇展開案「山椒大夫」（中学校1年の例）

—人間の力の可能性を知らせる（→基底構造Ⅰ）—

○教材 「安寿と厨子王」森鷗外作

○教科書 ・修文館1年下・三省堂1年下・学図2上・中教2年

・池田3年上・教図3年

○設定の理由

この作品は鷗外が人権を無視した人身売買に対する憤りを、王朝から伝わる哀話を通じて訴えようとしたものである。女中奉公や都会人に憧れをもつたりする漁村の生徒達に、基本的人権の尊さ、人間の力の可能性等を知らせて生徒達を勇気づけ前向きの“かまえ”をさせてゆくには比較的適切な教材である。

○目標

物語のすじをたどつて事件や人物の動きを読みとらせ、人身売買、奴隷制等について討議させながら、基本的人権の尊さを知らせ、そのたたかいのための人間の力の可能性についてくみとらせる。

○展開（時間配当等略）

問題意識の実態	問題意識の喚起	学習活動	指導の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ・女中奉公 ・家族労働 	<ul style="list-style-type: none"> ・安寿の様子の変化は何を意味しているのだろうか。 ・奴隷の労働がどんなにきびしいか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自読む ・問題点をノートする ・変化してゆく表情を書きぬく二人の仕事についてしらべる 	<ul style="list-style-type: none"> ・変化の様子を文章に即してつかませる。とくに変わりゆく彼女の表情の提出に注意させる。 ・厨子王にさえ語らぬ一念の集中が結晶してゆく安寿の内面的な力をつかみとらせる。
<ul style="list-style-type: none"> ・民主主義は漁師にはあわない。わるいところもある。 ・都会の人はえらいように思う 	<ul style="list-style-type: none"> ・安寿と厨子王はなぜこのようなつらい運命におちたか。 ・奴頭の性格や態度をどう思うか。 ・安寿はどうして毫光のさすような輝しい顔をしていたのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 討議 読む 討議 	<ul style="list-style-type: none"> ・封建時代の人身売買奴隷制度幼少年労働等について考えさせる。現代ではどうか。 ・上の者のいいつけを神のたくせんのように聞く奴頭の「今のにが笑いのような表情は人に難儀をかけずにはすまぬとあきらめて、何か言ったりしたりする時に、この男の顔に現れる」という叙述は権力者に追従する狡智にたけた人間の表情をみごとに画きだしている。 ・小萩から道順まで聞いて逃亡を企てている安寿の決意とその計画性に注意。「かれいけだけは持つていけ」という細心。
<ul style="list-style-type: none"> ・大きくなつたら別府の女中奉公に行つてお母さんにお金を送りたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・「沼のはたで、小さいわらぐつを一足ひろつた、それは安寿のくつであつた」というのは何を意味しているのか。 ・安寿のこの行動についてどう考えるか。 ・曇猛律師の態度や性格をどう思うか。 ・鐘樓守についてどう思うか。 ・山椒大夫は最後にどうなるのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 読む 発表 討議 討議 読む 	<ul style="list-style-type: none"> ・安寿と厨子王の別れの場面もただ感銘だけにひたらせるのではなく、むしろ安寿が投身してしまつた二値論的行動犠牲的行動に対して批判させる。これは前にもでてきたうば竹の自殺についても同様。女中奉公はこれに類しないか。 ・暴力に対して抵抗する曇猛律師の勇気ある態度、鐘樓守の機智等も忘れてはいけない。 ・鷗外は「山椒大夫はのちに奴婢を解放して給料を払うことにした。大夫の家では一時それを大きい損失のように思つたがこの時から農作も工匠の業も前に増して盛になり一族はいよいよ富み栄えた」という平和的解決のしかたをして

<ul style="list-style-type: none"> ・船がソウ難し て時も神様が助 けて下さる 	<ul style="list-style-type: none"> ・「守本尊」「神仏の助け」等 の問題についてどうか ・鷗外が書いた当時の社会状 勢はどうであつたか。 ・各自で感想文を書いてみよ う。 	討 議 調べる 作 文	いる。 <ul style="list-style-type: none"> ・鷗外が「山椒大夫」に描こうとしたテーマは、 実際はもつと激しいものであつた。しかし、そ の当時の社会状況と鷗外の公人的地位（軍医総 監）等によつて表現にある程度の制約を余儀なく され、宗教的なくさみをもつものになつた。
---	---	---------------------------	---

（『漁村と教育 第2分冊』130-136ページ）

「漁村における文学作品の内容系列」の6項目は、「自然」や「生産」「生活のすがた」といった漁村の特性をふまえつつ、一方では「基本的人権」「労働」「民主主義」「平和」などの普遍的な主題も含めて系列化が図られている。

7 おわりに

本稿では主として資料の提示に努めたが、文学教育に関しては、読書教育も含め、作品のもつ内容的な価値によって学習者に影響を与えていこうとする、それまでの、いわば戦中型の文学教育観と、学習者の「問題意識の喚起」をねらった戦後型の文学教育観が並存していることがうかがわれた。

読書教育についても、テーマ中心の分類であるが、文学教育の中に「文学作品の選び方」についての意識がみられるのは特徴的であった。

紙幅の都合で、本書に収録されている国語科の他の領域の実践については、取りあげることを保留している。引き続き本書の他の実践について考察したうえで、本書全体の検討へと進むこととしたい。

注 拙稿「地域教育計画における言語の学習指導—大分県教育研究所『山村と教育』（1953年）について—」福岡教育大学紀要第58号第一分冊文科編、1-15ページ。大分県教育研究所が1950年代に刊行した研究報告の一覧も、この稿に記載。

資料の引用にあたっては、原則として、かなづかいはそのままとし、漢字は現行の字体にあらためた。また、明らかな誤植と思われる点は修正している。記号やレイアウト等についても読みやすいように修正している箇所がある。